

『春淫狩り ―パブリックスクールの獣―』

著：高月紅葉

ill：笠井あゆみ

「やあ、ローレンス！ まだ、ここにいたのか！」

やけに大きなビリーの声に、ローレンスは小さく飛び上がった。大股に近づいてきたビリーの腕が馴れ馴れしく腰に回り、ダニエルが不思議そうに眉を動かす。

それをちらりと見たビリーが言った。

「話しておきたいことがあるんだ。一緒に食堂へ行こう。……ダニエル、君は先に行って席を取っておいてくれないか」

「……一緒に行けばいいじゃないか」

ダニエルに断られるとは思わなかったのだろう。ビリーから不満げな視線を向けられ、ローレンスは仕方なく親友に声をかけた。

「ダニー。監督生の活動の話だ。遠慮してくれるか」

「そこで待ってるよ」

いつになく、かたくなだ。あの夜のことを知っているのではないかと、ローレンスは内心で怯えた。

「ローレンス、向こうへ行こう」

ビリーは気分を害したように眉をひそめ、ダニエルをきつく睨みつけた。

「俺たちの話に首を突っ込みたいなら、バッチをもらって来いよ」

冷たい捨て台詞に、ローレンスは驚いた。バッチというのは、テイルジャケットの襟につける監督生の印だ。

特権を有する差別意識をあからさまにしたビリーに引っ張られ、ローレンスは校舎の端まで連れて行かれた。

中庭に出る階段を降り、初夏には小さな蕾が咲き乱れるバラ棚のわきでビリーの足が止まる。いまは葉もなく、細い枝が風に震えるばかりだ。生徒の姿もない。

「ダニーに、あんな言い方をするな。監督生は生徒の模範となるべき……」

「副生徒代表が、あんなに淫らな姿を見せておいて、よく言うよ。忘れたつもりか？ フォックスなんて断れると思ってるんだろう」

「当たり前だ。あれだって、合意じゃなかった」

「気持ちよかったくせに」

「薬を仕込んだだろう……。卑怯者」

負けじと睨みつける頬に手が伸びて、ローレンスは見据えたまま撥ねのけた。

「ローレンス。おまえにはふたつの選択肢しかない。俺を選んで、ふたりだけの時間を楽しむか。フォックスとして、みんなの前で抱かれるか。答えは考えるまでもないだろう。動揺も収まったみたいだしな」

「どちらも断る」

「……あの映像、公開してもいいんだぞ。タブロイドに売れば、一面は確実だ。女狂いの父親に、男狂いの息子。こんなゴシップはない」

「そんなことしてみろ。OB会から締め出されるのは、おまえの方だ」

「さあ、どうかな。俺が、そんなにバカだと思うか」

ビリーは遠慮なくふたりの距離を詰める。サッと腕を伸ばし、ローレンスの腰を抱き寄せた勢いでステップを踏む。よろめいた身体が振り回され、反対側へと追い込まれた。肩が赤煉瓦の壁にぶつかる。

「おまえの友達はどこかで見てるかもしれないな。心配してるような顔をして、夜な夜な、親友の面影で抜いてるんじゃないのか」

「……おまえは最低だ」

「ローレンス。性的な欲望は間違いじゃない。それぐらいは知ってるだろう」

ビリーの指が、ローレンスの髪を撫でる。柔らかな毛先を巻き付けた。

「おまえが、クリフへの想いを持って余してるぐらい、俺にはわかる。なあ……、それでもいいと言ってるんだ。俺はお前とやりたい。残りの学生生活を、おまえに捧げる。いいだろう？」

耳のそばに息を吹きかけられ、壁に追い込まれているローレンスは教科書を取り落とした。

「おまえの遊びに付き合うぐらいなら、フォックスになった方がマシだ。誰に抱かれたって、それを見られたって、おまえみたいな男とは秘密を持ちたくない」

「ローレンス」

眉をひそめたビリーが舌打ちする。

「キツネ狩りにクリフは参加しないぞ。あいつは名ばかりの会員だ。いままでだって一度も来たことがない。新加入の儀式には参加したって話だけだな」

「ロチェスターなんて関係ない」

浅い息を吸い込み、ローレンスはビリーを睨んだ。自分とは違う、分厚い胸を力いっぱい押し返す。

「……フォックスは、仕留められたあと、自由になれるはずだ」

震える声で口にすると、ビリーは驚いたように目を開いた。

「もう通達が来たのか」

今朝のことだ。部屋のドアの隙間に、手紙が差し込まれていた。

丁寧なカリグラフィーで筆跡を追えないようにしてあり、内容は『キツネ狩りの夜』への誘いだった。ルールが簡潔に書いてあり、『味見』を終えてからの拒否にはペナルティが科され、その内容は『運営』が決める、とあった。期日までに、望む報酬を書いて返信するようと、返信用の封筒まで同封してある親切ぶりだ。あて名はロンドン市街地で、おそらくレンタルオフィスの類なのだろう。

つまりフォックスとなるローレンスの同意を得ずに『味見』を行ったビリーは、クラブの取りまとめを行う特権を悪用したのだ。はからずもフォックスとなってしまったローレンスが、自分で相手を選ぶ方法はひとつ。

すでに決まった相手がいると宣言し、つがいの行為を見せることだ。相手は会員でなくてもよく、挿入まで至らない行為でも許されるらしい。要するに公開セックスショーをして、余興の報酬を得る。そんなことが、手紙の中にはもっともらしく書き連ねてあった。

相手がいなかった場合は、会員に仕留められる。

「公開オークションなんて、趣味が悪い」

ローレンスが言うと、ビリーは失笑した。

「俺が決めたわけじゃない」

「OBに牛耳られるクラブにいて、楽しいのか」

「来年からは、俺もその楽しみを味わうんだ。楽しめるだろう。彼らはおまえがフォックスになったと知って、オークションを設定したんだ。他にもフォックスを追う方法はいろいろある」

「聞きたくない」

ローレンスは苦々しく顔を歪めた。すべてが悪趣味だ。

「自分の兄がいる可能性は考えないのか。かわいい末の弟が男に犯されるなんて、名家の嫡男には屈辱だろうな。それを、会員すべてが知るんだ」

「……ビリー」

「ピストクラブのリストは、卒業後にしか見られない。そのとき、俺にはおまえの兄がいるかどうか分かる。おまえの兄には残酷だが仕方ないだろう。これも『伝統』だ。なあ、ローレンス。俺に助けを求めろよ。兄さんの立場まで悪くさせるな」

ビリーの顔が近づいてきて、逃げようとしたあごを掴まれた。頬を舐めあげられ、浅い息を繰り返す唇が男の親指で押された。

「俺が、なにを報酬として頼んだと思う」

怒りに震える声をひそめ、ローレンスは腹の奥に力を込めた。

「おまえの不名誉だ」

口にした瞬間、ビリーが両手で壁を叩いた。顔の両側に風を感じ、ローレンスは目を細める。

「だれが俺を抱こうと、おまえに復讐ができる。……こんなところで俺を口説いている場合か？ 手回しをしておけよ」

「……ローレンス」

両手の間にローレンスを閉じ込めたビリーは唸るように声を絞り出す。震えて聞こえるのは、笑っているからだ。

「なかなか良いやり方だ。でも、俺はそれほど間抜けじゃない。俺に手を出せる奴なんていない。少なくとも、ピストクラブの界限ではな」

勝ち誇った顔でローレンスの頬を撫でた。

「キスは、仕留めるまで取っておいてやるよ。おまえの値打ちに見合うような報復は期待するな。ミスター・バイオレット。せいぜいジュニア時代の失態が公表される程度だ。……来週にはもう、俺の女だな」

ローレンスの青紫の瞳を覗き込んだビリーは、そのときを想像して舌なめずりした。

「どっちにしたって、飽きるほど抱いてやる。一晩だけの関係だと思うなよ」

外廊下を歩いてくる足音に気づき、ビリーが身体を離す。ついて来いと言うように腕を引かれたが、ローレンスは拒んだ。

手はするりと離れ、ビリーはそのまま小走りに去っていく。取り残されると、途端に膝が震え出す。立ってられないほどになり、ローレンスはその場にしゃがみ込んだ。

笑いたい気分なのに、胸の奥が痛くて涙が溢れそうになる。

「ローレンスなのか？」

ふいに頭上から声がかかり、すぐに生徒が階段を駆け下りて来た。もっとも会いたくない男は、絶妙に都合の悪いタイミングで近づいてくる。

美しく磨きあげられたクリフの革靴を、しゃがんだローレンスは目で追った。

「こんなところで、なにをしてるんだ。……成績が悪くて泣くような年齢でもないだろう？」

足元に落ちている教科書が拾われる。クリフが砂を払った。

「俺には言いたくないか。……通りがかったことも、怒ってるんだろうな。声をかけたりして悪かった」

腕を引っ張られ、のろのろと立ち上がる。ジャケットのテイル部分を揺らして砂を落とす。クリフが背中中の汚れを叩いて払う。

「ほっといてよ」

子どもっぽく答えると、クリフは自分のポケットを探り、チョコバーを一本取り出した。

「もうランチの時間も終わる。これを食べておけ。……おまえを捜していたんだ」

ローレンスはうつむいたままでチョコバーを受け取り、包装を剥いだ。二人分の教科書を抱えたクリフは、続けて口を開いた。

「アルから連絡があった。俺かおまえか、どちらでもいいから折り返せって用件だったから」

兄の名前を出され、ローレンスは弾けるように顔をあげた。

「おまえが見つからなかったから、俺が電話をしておいた。おまえの父上の話だ。……顔色が悪いな。いつからここにいたんだ。風邪で寝込んでいたんだろう。また悪くするぞ」

父の話だと聞かされて安堵したローレンスは、細く息を吐く。クリフの眉根に同情が滲んだ。

「そんなに心配してたのか。だいじょうぶだ。それほど話題にはならなかったようだし、火消しは成功だろう」

「そうか。……よかった」

「ローレンス。寮へ戻るか？」

心配そうに顔を覗き込まれ、視線がわずかに交錯する。ローレンスはふいっと顔を背け、チョコバーをかじった。

数日前までは、校内で見かけただけでも息があがり、よからぬ妄想ばかりを逞しくしていた相手だ。なのにいまは、欲望を乗り越えようとする心のよりどころになっている。

「ビリーはまだ、あきらめていないみたいだな」

クリフが唐突に言い出す。ローレンスは黙ったままでチョコバーを食べ切る。ゴミをまとめて、スラックスのポケットに突っ込んだ。

「聞こえてるのか」

バンドでまとめた教科書の束を引き取ろうとすると、クリフは意地悪をするように身をよじった。無心になっていたローレンスは、ハッと息を飲んだ。

「ごめん。なんの話？」

「やっぱり熱が下がりきってないんだろう」

クリフの片手がローレンスの前髪をかきあげる。もう片方の手に教科書を抱えたまま顔を近づけたかと思うと額で熱を確かめた。

至近距離に近づいたクリフの瞳を、ローレンスは不思議なものを見るように目で追った。幼さの滲む仕草に気づいたクリフが眉をひそめる。

「そんなに驚くなよ。熱はないみたいだ。それより、冷え切ってる。やっぱり寮へ戻って、午後は休んだ方がいい。送って行こう」

「ひとりで戻れる」

答えたローレンスは、ないはずの熱が上がったような気がした。足元がふわふわとおぼつかず、ぼんやりと見つめる先にいるクリフが眩しい。

不審がられるとわかっていたが、踵が浮き上がり、よろめくように肩へともたれかかる。

「少しでいい。このまま……」

「こんなところで、こんなこと。誤解されるぞ」

「嫌なのか」

クリフのジャケットに沁みついたスモーキーな香水を吸い込み、ローレンスは責めるように言った。その自分の口調が、相手にどう聞こえるかは考えない。

ただ、ほんの一瞬でいいから気を抜きたかった。

あの夜のことが夢でない以上は、来週の『キツネ狩り』を避けられない。アルバートやクリフに知られる結果になったとしても、卒業を最優先にして覚悟を決めるしかなかった。

たとえ、別の男に抱かれる結果となっても、ビリーに屈することだけは自尊心が許さない。

キツネ狩りに参加する本当の報酬も、ビリーの不名誉ではなく、自分の名誉が守られることだ。金もコネクションもローレンスには必要ない。あの映像が外へ出たとき、発言力の大きな人間が、ローレンスではないと言ってくれればいいのだ。人が口を閉ざせば、噂はすぐに消える。

「ビリーよりは、俺の方がマシか」

クリフのつぶやく声が聞こえ、ローレンスは目を閉じた。

聞きたくない名前だ。特に、クリフには口にして欲しくない。

ピストクラブの会員なのかと問いたくなるのをこらえ、ローレンスは身体を離れた。

「あいつが本当に俺を愛していれば……、良かったのに」

ローレンスは自虐的に言って唇を噛んだ。そうであれば、口説き方はもっと違っていただろう。そして、フォックスに選ばれることもなかった。

ビリーが紳士でなかったことが、すべてを狂わせたのだ。恋を軽んじ、性をもてあそぶ。そんな遊び方がローレンスにはできない。

「そんなことを言うなんて意外だな。困っているなら、相談に乗るぞ」

クリフの申し出に紳士らしい気遣いを感じ、ローレンスも戻けられている通りに答えた。

「迷惑はかけられないよ」

どんなに助けが欲しくても、家族でもない相手の手に飛びついてはいけない。

感情の抑制こそ美德であり、誇張は避けられるべき悪徳だ。アッパー・クラスに代々伝わる戒律はローレンスの胸に深く根差している。クリフもそうだろう。

お互いの感情を剥き出しにできた少年時代はもう遠く、赤裸々に語り合う術も持たない。これまでのローレンスのふるまいが、それをさせないのだ。クリフとの間には友情さえ存在しない。

「……ここに、ビリーもいたのか」

つぶやくようなクリフの言葉を避け、ローレンスはその脇をすり抜ける。金色の髪が寒風になびき、休憩時間の終わりを知らせる鐘の音が響いた。

ローレンスの腕を引き止めたクリフの指に、ぐっと力が入る。責められているような気がして顔を伏せると、教室へ向かう生徒たちの声がした。

気を削がれたクリフの指から、ふっと力が抜ける。それを頼りなく感じて、ローレンスは顔をあげた。

「恋ってものは、腕を引きちぎられるようなものだろうか」

「詩的ではないな」

クリフが静かに笑う。焦げ茶色の髪が精悍な額にこぼれて凜々しい。目を奪われたローレンスは、幼い日々のやりとりを覚えているのは自分だけだと感じて落胆する。

この恋が叶わないことなら知っていた。近づかないようにして、嫌っているのだと自分自身に繰り返して、恋心の存在自体を否定し続けて来た。

「ローレンス。……よく考えろよ。ここでの行為は、後にも尾を引く。けっして、檻の中の感傷では済まない。慎重に……」

「そんなこと、おまえに言われるまでもない」

前髪をかきあげ、ローレンスは胸を張る。いつもの自分を演じながら、もう元へ戻れないこともわかっていた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>